

A Dictionary of Fairies

【推薦のことば】



妖精研究では他の追隨を許さないキャサリン・ブリッグズ女史の原著を四人の碩学が翻訳したユニークな事典。
ケルト圏を含むイギリス諸島および西欧の文学・民話に登場する妖精を集成。
見えない世界へのガイドブック

* 著者念願の日本語版

筑波大学教授 小澤俊夫

本書は、学問的な参考文献としてよりも、どこからでも拾い読みできる、読みものとして書かれたのだが、内容はかなり高度な、口承文芸の案内書である。

妖精の世界に心をひかれる人は多いが、あまりに多様な様相のために、全体的イメージがつかみにくいと思っている人は多いだろう。そういう読者に最適の書物である。

1979年、エディンバラで開かれた国際口承文芸学会で、居並ぶ一流学者の中に、ひとりの白髪の上品なレディーがおり、周囲の尊敬の眼を集めていた。それがブリッグズ女史だった。そして、パンケットの折、わたしに「こんどわたしの『妖精事典』が日本語に訳されることになったのですよ」と嬉しそうにおっしゃった。

本書が日本の読者にも広く読まれることになり、女史も天国で喜んでいることだろう。

* 知る喜び、しらべる楽しみ

青山学院大学教授 神宮輝夫

イギリスの児童文学作品には、スコットランドの水の精ケルビーがしばしば現れるが、この恐ろしい妖精が河童とつながるという学説（石田英一郎著『河童駒引考』）を読んだときの驚きは忘れられない。それは、綿密な考証が意外としか思えないものを結びつける研究のすばらしさへの驚きと、人間の不思議さへの驚きだった。

それ以来、門外漢の気楽さもあって、興味をひかれる民俗学的研究にはできるだけ目を通すことにしているが『バックの分析』『伝承と文学における妖精たち』などブリッグズ博士の業績からは、知る楽しみと研究上の多くの示唆を与えられた。彼女の長年の研究の集大成『妖精事典』の10年という歳月をかけた訳出は、民俗学、文学、児童文学等の研究に多大の貢献をするばかりか、愛好家に深く知る喜びを与えてくれると確信する。



* 妖精をたずねる旅へ

詩人 矢川澄子

妖精のように、などとわたしたちは気がるにいう。小人のようだといわれて不機嫌になるひとはあっても、妖精のようだといわれて怒るひとはまずいない。とはいえその妖精なるものについて、わたしたちははたしてどれほどのことを知っているだろう。いうところの妖精の美しさ、妖精のかるやかさ、妖精の気まぐれ、妖精の感じやすさ――

だいたい妖精という種族はもともとこの島国に生まれついたのでなく、僅々二、三世紀のひまにユーラシア大陸の彼方からわたってきた、わたしたちにとっては二重、三重の意味での外人、異人なのだ。宇宙旅行の可能になったいまでも、彼らのルーツをたずねる旅だけはそれほどたやすくはない。ブリッグズ女史のこの事典は、そのまぼろしのツアーのための何よりのすぐれたガイドブックになることだろう。

富山房 TEL 03-3291-2179 / FAX 03-3291-2179

貴店印

妖精事典 新装版

ISBN978-4-572-00484-0

冊

富山房 本体価格6,000円